SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

Dialogical exploration of life and death issues : Trajectory of Shiseigaku Cafe

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-10-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹之内, 裕文 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027723

対話を通して生と死を探究する
――死生学カフェの挑戦

竹之内　裕　文

死生学カフェは、二〇一五年一月に静岡市で発会した。以来、隔月に一回のペースで開催され、現在まで二十九回を数える。この五年間で死生学カフェのネットワークは広がり、定例や特別企画の死生学カフェが日本の各地で開催されるようになっている。

人びとはなにに惹かれて、なにを求めて、死生学カフェに参加するのか。そこではどのような対話が生み出されているのか。なぜ対話を通して生と死を探究するのか。そもそも対話するとは、どういうことか。小論では、死生学カフェの歩みをふり返りながら、これらの問いに回答を試みる。

論述の手順は、次の通りである。どうして死生学カフェを創始しようと考えたのか。その背景と経緯を、まずふり返っておく。次いで、現在までの死生学カフェの歩みを辿る。それはさしあたり、草創期（二〇一五年）、形成期（二〇一六年―一八年）、成熟期（二〇一九年―現在）に区分される。各期の対話のテーマと進め方を紹介し、理念と方法をめぐる試行錯誤に光を投げかけよう。その際、類似した試みとして「デスカフェ」と「哲学カフェ」をとり挙げ、「死生学カフェ」との異同を明らかにする。生と死の対話的探究の発展に資するため、虚飾を捨て、失敗から学ん

だことを率直に報告したい。

一　死生学カフェを立ち上げる――三つの出会いに導かれて

死生学カフェは、いくつかの出会いを機縁に生まれた。ここでは三つの出会いを挙げておく。

二〇〇二年の秋、筆者は一人の在宅緩和ケア医と出会い、翌年四月から彼とともに、仙台市で「タナトロジー研究会」という臨床死生学の研究会を始めた。[1] 彼に連れ立って、また彼の診療所のスタッフ（医師、看護師、ヘルパー）に同伴して、筆者は終末期病者の自宅へ出かけ、患者や家族の話を聴いた。[2] 遺族の語りに数時間、耳を傾けたこともある。[3]

この診療所では、死生観にかかわる患者や家族の発語を担当スタッフが記録し、電子ファイルに保管していた。研究会では、それらの言葉を囲みながら、スタッフをはじめ、多領域の専門職や研究者と対話を試みた。これが「対話を通して生と死を探究する」という試みの出発点であった。とはいえ、患者や家族が研究会に姿を見せることは稀だった。当事者が不在のまま、対話を通して生と死を探究していたといってよいだろう。

「死」を前にして、あるいは「死別」を経験して、当事者は、複雑な思いを抱えこむ。「言うに言われぬ」思いが胸中に積もる。もしそれを言葉にすることができたら、不分明な思いの輪郭が定まり、そこから距離をとることができる。聴き手に恵まれるならば、苦難の渦中にある者は、混沌とした思いを言葉にしようと試みるだろう。どのような言葉が実るか、それはだれが、どのように聴くかに応じて異なってくる。語る者と聴く者の間の出来事として、その都度、言葉が創造されるのだ。

しかし必ずしも、聴き手に恵まれるとは限らない。じっさい「死」と「死別」にかかわる諸課題は個別性が高く、

しかも話題として「重い」ため、当事者の語りに聴くことは、容易ではない。家族や友人であっても、距離が近い分だけ、気遣いや感情のもつれから、言葉をそのまま受けとめられないことがある。「研究会」の敷居が高いというのであれば、それと別に、当事者たちが気軽に顔を出せるオープンスペースを設けよう。多様なメンバーが集まり、当事者を囲んで、その語りに耳を傾けるのだ。そのような開放空間を創出すること、それが二人の夢だった。

二〇一一年の春、筆者は在外研究の機会を得て、家族とともにスウェーデンで生活を始めた。そこでは日常生活のいたる場面で、たとえば友人宅、パブ、美容室、タクシーの車中などで、人びとが「対話」を楽しんでいた。

日常的なやりとりから、問いが立ち上がり、「対話」が始まる。共通の問いに対して、自他の見解が述べられる。意見は一致しなくて構わない。いや、むしろ一致しない方がおもしろい。自分と異なる意見であるからこそ、それがどんな背景や根拠によって支えられているのか、知りたくなるのだ。

「対話」を通して自他の違いを認め、異論や異説に敬意を払う態度が培われる。「わたし」の理解の枠組みに収まらない他者として相手を受けとめ、共に生きる足場が築かれる。[4] スウェーデン社会に身をおきながら、見聞を広めるうち、先駆的な社会保障制度や環境政策で知られる社会の礎が「対話する文化」によって築かれていることがわかってきた。[5]

「対話」との出会いは衝撃的だった。それは日本社会では、なかなかお目にかかれないものだった。「政治と宗教の話はするな」と言われるように、日本社会では思想や信条など根本価値にかかわる話題が避けられる。原子力発電、憲法改正、死刑制度、尊厳死について、日常生活で自由に意見が述べ合われることは稀である。かりに話題に上ったとしても、意見や立場が異なれば、物別れに終わってしまうことが多い。

日本社会では、政策決定と市民的討議との間に断層がある。社会的な合意形成へ向けた努力が棚上げにされ、望ま

しい社会や暮らしをめぐる公共的な討議を経ずに、政治・経済、科学技術、医療・福祉、教育の分野で、重要な政策が次々に決定されてきた。大惨事を引き起こした原発政策は、その延長線上に位置するといってよい。

福沢諭吉は日本社会の「無議の習慣」を指弾していた――危機や重大な事態に直面しても、「無議の習慣」ゆえに、人びとは口を閉ざし、議論を回避し、穏便に事を運ぼうとする。[6] それからおよそ百五十年が経つが、大きな変化は見られないようだ。[7]

互いの立場を探り合い、「空気」を読むのでなく、一人ひとりが自由に発言し、異なった意見に耳を傾ける。性別、年代、職業が違えば、共通の課題に対して、異なった角度から光を投げかけることができる。それによって問題が立体的に浮かび上がる。それに照らして各個の考えを吟味し、視野を広げることができる。異なった価値観を包容する「寛容」が身につく。「対話」とともに、よい社会へ向けた一歩が踏み出されるのだ。

日本社会の「無議」は、福沢その人が指摘するように、「習慣」である。習慣であれば、変えることができる。まずは自分の足もとから始めよう。こうして筆者は帰国後、「対話」の場を拓く準備に着手した。仲間たちとともに研究会を立ち上げ、二〇一三年六月に哲学カフェ@しずおかの創設記念講演会を開催し、同年八月から二〇一九年二月まで、計四十回（定例三十三回、特別企画七回）の哲学対話を試みた。[8]

哲学カフェの初期の参加者に、ある看護師がいた。彼女は小児専門病院で死別体験を重ね、「喪失」や「グリーフ」と向き合うようになった。グリーフケアを本格的に学び、グリーフカウンセリングの専門家として活動を始めたところだった。聞けば、哲学者と協働する必要を感じて、哲学カフェに参加したのだという。彼女と筆者は対話を重ねた。それは筆者にとって、「グリーフ」という概念に照らして自らの死別の経験を受けとめ直す機縁となった。

彼女との出会いに先立って、筆者は、前述の在宅緩和ケア医と死別していた。別れは、故人とともに描いた夢を映

し出した。スウェーデンで「対話」のレッスンを受け、帰国後、哲学カフェで経験を積んできた。そして今や、共通の課題に情熱を傾けるパートナーに恵まれた。「死」と「死別」について対話する開放空間を拓く時機が到来したように思われた。

筆者と彼女が発起人となり、二〇一四年一一月一日に「死生学カフェ」（仮称）の創設準備会を開催した。十名の世話人が参画し、自己紹介に引き続き、カフェの名称と目的、会場、開催日程、プログラム、役割分担などについて話し合った。

「生と死のカフェ」という別案もあったが、正式名称は「死生学カフェ」に落着した。ただしここで「学」は、特定の学術分野を指示するのでなく、「学ぶ」という態度を表わす。それゆえ「死生学」とは、「死とともに生きることを学ぶ」ことをいう。[9] 死生学カフェでは、「対話を通して死とともに生きることを学ぶ」のだ。

では「対話する」とはどういうことか。なぜ対話を通して生と死を探究するのか。準備会では残念ながら、その点を掘り下げて考えることができなかった。「対話」の本質と意義に踏み込んで話し合うことができず、それゆえ「対話」の場のイメージを共有できないまま、死生学カフェは出帆したのだ。

会場は、あるデザイン会社のミーティングルームに決まった。明るく開放的な空間で、オーナーの厚意により、さしあたり一年間は借室できるということだった。開催日は、奇数月の第一土曜日に設定した。この日のため、先行する哲学カフェを偶数月だけの開催にとどめ、奇数月を空けておいたのだ。時間枠は、哲学カフェと同様、一五時開会、一八時閉会とした。発起人の二人は、共同代表に就くことになった。

死生学カフェの趣旨を広く共有するため、二〇一五年一月一〇日に創設記念会を開催し、定例の死生学カフェは、その二か月後（三月七日）から始めることにした。当日のプログラムを練り、広報、事前申込、飲み物の準備につい

て話し合った。司会、受付、ファシリテーションなどの役割分担を定めて、準備会を終えた。

二「探究」と「ケア」の相克——草創期（二〇一五年）

地方紙の記事で紹介されたこともあり、創設記念会の会場は、七六名の参加者で埋まった。それ以上の座席を用意できなかったため、参加を断わらなければならない申込者も多数に上った。開会の挨拶と世話人の紹介に続いて、「死生学カフェという新しい試みのために」と題して、筆者が講演した。

死生学カフェは、生きること、死にゆくこと、かけがえのないものを失うことなど、生と死にかかわる多様な課題について、当事者の語りに聴くという姿勢を大切にしながら、対話を試みる場です。

創設記念会のフライヤーに記載した右の言葉には、世話人の共通理解が反映されていた。これに解説を加えるかたちで、講演では、（1）ある在宅緩和ケア医との出会いと別れ、（2）「死生学」という営みについて、（3）対話の場としてのカフェ、（4）死生学カフェの進め方について、筆者の展望を示した。

そのうち（1）と（2）については、すでにふれた。（3）に関しては、欧州の都市における十七世紀以来の「カフェ」の伝統を紹介し、一九九二年にパリのカフェで生まれた「哲学カフェ」（「ソクラテスのカフェ」）との対比で、「死生学カフェ」の輪郭を描いた。[10]

現代社会における「死」の現状と課題について広く知識を得たいのであれば、入門書や専門書にあたればよい。関連する学会や研究会に参加することもできるだろう。「死」に関する概説や評論であれば、その気になればふれる機会

がある。しかし身近で具体的な「死」について、当事者が語り、他の参加者がそれに聴く、という場は限られている。ましてや、境遇や思想を異にする参加者が一堂に会し、かけがえのない人との「死別」や各人の「死」について語り合う場となると、それこそ稀有である。ここに創設しようとしているのは、そのような対話の場である。

「死」はすべての人に不可避にかかわる。すべての人が当事者であるといってよい。それゆえ大切なことは、当事者として互いに学び合うことだ。それを実現する方法が「対話」である。対話は、相手の言葉に聴くことから始まる。その意味で死生学カフェはさしあたり、「固有名をもった生と死の語りに共に聴く」場と特徴づけられる。参加者は具体的な「生」と「死」に学び、「死生観を鍛え合う」のだ。

（4）死生学カフェの進め方については、担当者による「提題」（三〇分）とそれを受けた「自由討議」（七〇分）を中心にプログラムを組み立てる。

まず「提題」を通して、対話を主導する問いを設定する。問いを支える前提や背景について、担当者が詳しく語ることで、すべての参加者に対して問いが開かれると期待される。参加者はもとより、世話人どうしもほとんど面識がないのだから、世話人一人ひとりの物語を聴くことは、互いを知る機会にもなる。提題は当面、一〇名の世話人が輪番で担当する。

「自由討議」は、前半（三〇分）と後半（四〇分）に分け、間にフリータイム（二〇分）を挟む。前半は、提題に対する応答をグループで共有する。その後、コーヒーなどを飲みながら、各人が思い思いの時間を過ごし、後半は、提題に触発されて考えたことをグループで自由に語り合う。

「相手の言葉に注意深く耳を傾ける」ことを通して、安心して参加し、語ることのできる場を共に創り上げていこう。このメッセージとともに、講演は締め括られた。休憩後、七つのグループに分かれ、講演の感想と死生学カフェ

に対する期待を分かち合った。

二か月後、死生学カフェが始まった――二〇一五年のテーマ（提題タイトル）と参加者数は、文末の**表1**の通りである。第一回の死生学カフェでは、もう一人の共同代表が提題を担当し、第二回から第五回は、農学者、小児救急医、小児科医、助産師の世話人たちがそれぞれ担当した。

提題の目的は、前述の通り、「対話」を主導する問いを設定することにある。しかし医療職や学者が提題を担当したことで、死生学カフェはまるで市民講座の様相を呈した。参加者の対等性が損なわれ、対話する雰囲気は醸成されなかった。回を重ねるごとに、参加者は減少した。死生学カフェは、予期しない方向へ進み始めていた。

準備不足は明らかだった。準備会を一回開催しただけで、見切り発車してしまったのだから。ふり返ってみれば、創設記念会のプログラムにも問題があった。講演は、内容が多岐にわたり、難解だった。参加者はもとより、世話人の理解も追いつかなかったのではないか。提題の目的も、十分に共有されていなかったかもしれない。

これから対話の場を創り出そうという場面で、そもそも講演などすべきでなかった。むしろ「死生学カフェ」の趣旨を共有したうえで、「対話」の豊かさを参加者に体感してもらうべきだった。ただそれは、今だから言えることだ。当時は十分な経験と力量を持ち合わせておらず、すべてが手探り状態だった。

いずれにしても課題が噴出し、立て直しが急務だった。二月と四月に臨時の世話人会を開き、死生学カフェの基本理念と方法を確認するとともに、今後の方向性について話し合った。基本方針を明示すべく、「死生学カフェで大切にしたいこと」（以下「大切にしたいこと」と略記）を作成することに決めた。

時間をかけて話し合うことで、三つの課題が浮き彫りにされた。第一に、「ファシリテーション」の困難である。第二に、「対話」の理解である。最後に、「当事者とはだれか？」という問題である。

参加者には、死別経験者が多かった。臨死状態を体験した人もいた。これらの参加者は、自らの具体的な経験を語った。そうした経験をもたない参加者は、聞き役にまわった。こうして語る者と聴く者の役割が固定されてしまった。「固有名をもった生と死の語り」は生まれたが、「共に聴く」ことは実現されなかった。

深刻な体験に耳を傾け、それを受けとめることは、ただでさえ楽ではない。聴き手が痛みや傷を抱える場合、そのような語りを聴くことは、さらに難しい。激しい情動に見舞われることもあるだろう。ファシリテーターとして、それを放置することはできない。

また世話人の間には、ファシリテーションの技量に個人差が見られた。そのためグループ間で、「対話」の質と方向に大きな違いが生まれた。ファシリテーターとしてどのように対処し、介入したらよいのか。世話人たちから、「ファシリテーション」について学ぶ機会を求める声が上がった。

ちょうどこの時期（二〇一五年三月）、筆者はダギーセンター（米国オレゴン州）のグループ研修に参加し、グリーフサポートの一環として、ファシリテーションについて実地の学びを修めたところだった。[11] またダギーセンターのスタッフから、ポートランドで「デスカフェ」（Death Cafe）を主宰する葬儀業者を紹介され、先行する試みについて知ったばかりだった。[12] さっそくデスカフェのウェブサイトにあたると、「ファシリテーション」の手引きがあった。グループ研修での学びと併せて、それを世話人たちと共有した。

ただファシリテーションの技術は、「対話」の基本理解があって初めて活かされる。そして対話は「聴く」ことから始まる。「聴く」ことに踏みとどまれず、ファシリテーションの技術に手を伸ばすとしたら、それは本末転倒というものだ。問題の所在は「対話」の基本理解にあることが明らかになった。

しかし当時、参加者はもとより、世話人の間でも、「対話」の共通理解は確立されていなかった。「共に聴く」ことが

成立しなかったのは、その当然の帰結だった。共同代表の二人の間にも、「対話」の理解に食い違いが認められた。

相方の共同代表は、グリーフカウンセリングの実践に基づいて、「対話」を想定していたようだ。それは個別カウンセリングの次の段階に位置するが、なお臨床的ケアやサポートを必要とするものだった。事前の参加申込みによって参加者をコントロールするのも、「グリーフ」を抱える参加者に対するケアの一環だったのだろう。

たしかに「死」と「死別」をめぐる対話は、参加者の情動を揺さぶる。緊急の対応が必要なケースが出てくるかもしれない。しかし、こうした事態にいつでも対処できるように、ケアやサポートの態勢を整備すると、対話の場から「開放性」と「自由」が奪われてしまう。深刻な経験をもつ参加者は、ケアやサポートを要する者として特別視され、囲いこまれてしまう。そのような参加者を傷つけないように、他の参加者は配慮することを求められ、発言を控えたり、抑制したりするようになる。

それに対して筆者は、先に確認した通り、当事者の語りに共に聴くオープンスペースとして、「死生学カフェ」を構想していた。「カフェ」や「自由討議」といった表現が示す通り、「開放性」と「自由」は欠かせない要素だった――なお筆者はこの時期、「対話」(dialogue)と「討議」(discussion)を区別せず、互換的に使用していた。しかも筆者は「哲学対話」を礎に、死生学カフェの「対話」を構築しようと考えていた。それに応じて創設記念会の講演では、「対話」の成立条件として、哲学者ソクラテスとともに、「不知」の自覚を挙げておいた。

自分が大切なことを知らないと自覚するとき、人は相手の言葉に虚心に耳を傾ける。「不知」の自覚とともに、各人の探究が始まる。そして探究するから、他の意見に耳を貸す。「不知」の自覚が自他で共有される場合、対話的探究が始動し、「互いに聴く」ないし「共に聴く」ことが生起する。「不知」の自覚から出発するかぎり、対話は常に、すでに、「探究的な対話」である。

とりわけ「死」が主題とされる場合、対話は探究的になる。「死」について人間は、肝心なことをほとんどなにも知らないからである。たとえば『ゲド戦記』において、大賢人ゲドが弟子のアレンに語るように、「本当のところは、生がなんであるのか、死がなんであるのか、私たちは知らない」のだ。[13]

「死」はすべての人に不可避にかかわる。すべての人が「当事者」として、外部から推し量ることのできない多様な課題を抱えている。にもかかわず「死」について、すべての者は「不知」を免れない。死別経験者やがんサバイバーといえども、例外ではない。この二重の意味で、「死」に対して、すべての人間は平等である。他者が直面する課題は、けっして他人事でない。だからこそ「対話」を通して学び合うのだ。その学び合いの場こそ「死生学カフェ」である。

以上の通り、二人の共同代表の間には、「対話」と「当事者」の理解に大きな開きがあることが明らかになった。それは他の世話人たちが正しく受けとめたように、ケアモデルと探究モデルの相克であった。ふり返って考えれば、二つのモデルの基礎には、「聴く」ことの異種の理解があった。

私たちは身体的・情動的な存在者である。この共通性ゆえに、相手の身になって、「思い」を汲むことができる。表情や所作から、相手の「思い」を察することができる。「思い」を言葉にすることが難しい場合、聴き手が察してくれれば、大変ありがたい。このような場合、話者の「思い」に注意を傾けて聴くことは、大きな意義をもつだろう。

こうしてケアモデルでは、「聴く」ことを支える非言語的コミュニケーションの意義が強調される。発せられた言葉を額面通りに受けとめるだけでは十分ではない。「言葉を聴く」ことは、「思いを察する」ことに補完されて、初めて完成するのだ。

たしかに身体的・情動的な状態であれば、自他の共通性を支えに、「察する」ことが可能かもしれない。しかし相手は、自分と異なった時代と場所で生き、異なった経験や生活背景に基づいて、現在の「生」を築き上げてきた。目の

前の相手は、「わたし」の理解の枠組みに収まらない他者なのである。その「思い」を察することなど、本当にできるのだろうか。「できる」と安易に想定するとき、相手の複雑な「思い」を合理的に、都合よく解釈してしまう危険が生まれる。「共感」や「受容」が強調される場合、とりわけ注意が必要だろう。そこでは無自覚なまま、むしろ「善意」に基づいて、当事者の「思い」が勝手に読みこまれてしまう。それとともに相手の「言葉」は、素通りされてしまうのだ。

だからこそ探究モデルでは、予断を排して、相手の言葉に注意深く（carefully）耳を傾けることが求められる。語る者に敬意と関心を抱き、その言葉を注意深く受けとめるならば、相手から学ぶことができる。どのように接したらよいのかも、そこから少しずつ見えてくるはずだ。

日常の人間関係において、「言葉を聴く」ことと「思いを察する」ことは、いずれも不可欠である。さらに臨床の場では、ケア専門職は短時間で、相手の状態を的確に見てとる必要がある。そこでは「思いを察する」ことの比重が大きくなるだろう。では対話の場では、どうだろうか。

対話は、相手の言葉を聴くことから始まる。言葉が発せられないところでは、聴くことが成立しない。聴くためには、言葉が発せられるまで、待たなければならない。待つことに耐え切れず、「思い」を察してしまえば、当人はそれを自ら言葉にする機会を奪われてしまう。語る者と聴く者の共同の所産としての言葉は実らず、対話は生み出されない。対話はケアモデルではなく、探究モデルを要請するのである。

こうして死生学カフェは、早くも一年目から、再出発を余儀なくされた。探究モデルに基づいて、死生学カフェを改めてデザインすることが求められた。ただ二〇一五年の死生学カフェについては、すでにフライヤーを配付し、周知してしまっていた。世話人会で話し合い、二〇一六年一月から死生学カフェをリニューアルオープンすることに決めた。

リニューアルオープン後、死生学カフェに参画するかどうかの判断は、一人ひとりの世話人に委ねた。一〇名の世話人のうち、八名が参画することになった。その後、新たに四名の世話人が加わり、新生の死生学カフェは、一二名の世話人とともに出航した。

三　探究的な対話の場を共に創り上げる――形成期（二〇一六年―一八年）

二〇一五年後半は、三回シリーズの「世話人カフェ」（六月、八月、一〇月）を企画した。すべての世話人が参加し、筆者のファシリテーションのもと「探究的な対話」を体験し、理解を深めた。それに引き続き、新メンバーの世話人で、死生学カフェのリニューアルオープンへむけた「準備会」を開催した。今後の運営方針、会場、プログラムなどについて話し合った。また次節で述べるように、「デスカフェ」への加盟についても検討した。

「死」と「生」について制約なく対話する場を共に創り上げるという目標のもと、準備会では、各種の「枠をとっぱらう」ことが提案された。たとえば「死」にかかわる体験の有無や語られる内容の軽重によって、参加者を色分けしない。また一部の参加者が傷つくことを恐れて、ある種の発言を制限することをやめる。かりに参加者が泣いたり怒ったりしても、それも表現の一部と受けとめる。専門職としてではなく、一人の人間として、逃げないで、誠意をもって一人ひとりと向き合う。人は失敗から学ぶほかないのだから、失敗を恐れない。困ったら、世話人全員で対話し、その経験をふり返ることにしよう。

これらの方針は、デスカフェの（二〇一五年当時の）ガイドラインと合致するものだった。それによればファシリテーターは、「専門家ではなく同等のものとして」（as peers, not experts）対話に加わる。またデスカフェは「死別やグリーフサポートの資源」を提供する場ではないから、「特別なニーズが生じた場合」は、そのニーズに応える「資源

の所在とアクセスについて情報提供する」にとどめる。「死」と「死別」をめぐる対話は、専門職的なケアやサポートと結びつきやすい。両者を切り分けるべく、（当時の）デスカフェのガイドラインでは、このような方針が掲げられていた。

それを踏まえて、死生学カフェのファシリテーターの役割について、どのように考えるか。ひとり語り（monologue）が対話（dialogue）へ進展する手助けができれば理想的であるが、まずは「聴く」ことに徹しよう。かりにその場で「対話」が成立しなかったとしても、語りをしっかり聴くだけで、問いや課題が喚起され、それらを持ち帰って考える機会が与えられる。ファシリテーターの主要な任務は、「聴く」ことを先導し、「共に聴く」場を実現することにある。かりに発言者がいなかったとしても、慌てて発語する必要はない。人は考えるとき、沈黙するものだ。「しばらく考えましょうか」と参加者に声をかけ、「沈黙」の意味を共有すればよいのだ。

会場は、スノドカフェ七間町へ移転することにした。[14] このカフェでは二〇一四年四月から、哲学カフェを開催していた。また事前申込制を完全に廃止し、気がむけばだれでも気軽に参加できるようにした。そのような仕方で、対話の場の「開放性」と「自由」を確保しようと努めた。

第七回（二〇一六年三月）から、死生学カフェの開催日を奇数月第三土曜日に変更した。またカフェ当日は、受付開始（一四時三〇分）から閉会（一八時）まで、店舗を貸し切りにしてもらった。参加費は菓子つきのフリードリンクで、一〇〇〇円（学生は五〇〇円）に設定した。フリードリンクのメニューは、ホットコーヒー、ホットティー、アイスコーヒー、アイスティー、オレンジジュース、グレープジュースで、菓子の目玉は、各種マフィン（プレーン、イチゴ、バナナ、リンゴ、オレンジ、茶、チョコ）だ。受付で回収した参加費を集計して、そのまま店側に手渡すことにした。

世話人の役割分担も拡充した。ファシリテーター、司会、受付、写真撮影、進行表作成、アンケート集計に加えて、会計（常任）と配付物管理（印刷・管理）の担当を新設した。アンケートは回収状況や回答内容を踏まえて改訂した。デザイン会社の二階からカフェへ移転したため、会場案内や飲み物の手配など、不要になり廃止した係もある。リニューアルオープンを機に、マネジメントにかかわる役割分担を徹底した。

次にプログラムを見ておこう。「提題」は、担当者によるプレゼンテーションという枠をとっぱらい、映画や絵本など多様な題材を採り入れることにした。思えばポートランドでデスカフェの主宰者と話した際も、日本でデスカフェを開くならば、たとえば映画『おくりびと』を題材にしたらどうかと助言を受けていた。

しかし映画に関しては、早くも計画を練る段階で、二つの問題に直面した。死生学カフェ当日に映画を上映すると、それだけでかなりの時間を要してしまい、対話の時間を十分に確保することができない。また店舗で不特定多数を対象に、劇場用映画を上映すると、著作権（頒布権）に抵触してしまう。市内の映画館との提携を試みたが、首尾よく運ばなかった。

題材とする作品を指定し、参加者各自で事前に鑑賞してきてもらうという案も出された。しかし事情を知らず、指定された作品を観ないまま、来場する参加者もいるだろう。作品の概要をまとめた配付物を用意すれば、そのような参加者に対応できるかもしれない。しかしそれだと、事前の準備と当日の進行が煩雑になってしまう。「開放性」と「自由」の精神にも背馳する。話し合いを重ねたが、明確な結論に辿りつけないまま、この件は宙に浮いてしまった。

リニューアルオープンして最初の回（通算で第六回）は、筆者が提題を担当した。新生の死生学カフェの世話人代表として、筆者には、探究的な対話を主導する役割が求められた。筆者は自らの死別体験に基づいて、「喪失とともに生きる」ことにかかわる二つの問いを立てた。

（一）大切な人、物、事を失うという経験から、あなたはなにを学びましたか。
（二）喪失とともに生きることには、どのような意味や意義があるでしょうか。

右の問いをめぐって、各グループで対話した。休憩後、グループの対話を全体で共有し、一つひとつの発言を織り合わせながら、対話的探究を進めた。

第七回は、映画『生かされて生きる――自立する重度障害者の記録』（企画・制作社会福祉法人ありのまま舎、二〇〇三年）を題材にした。このドキュメンタリー映画は、阿部恭嗣という重度障害者が「自立ホーム」で営んだ日常生活を映し出すものだった。[15] 筆者は大学時代から、この「自立ホーム」に通い、筋ジストロフィー症とともに生きる阿部から、「共に生きる」ことと「本当に生きる」ことを学んできた。[16] 二〇〇六年に阿部と死別し、筆者の判断で自由に使ってよいと、この映画のDVDを寄託されていた。

著作権の問題が発生しないというのも、この作品を選んだ理由のひとつである。しかしそれを超えて、この作品は、死生学カフェの新たな門出を飾るにふさわしいものと思われた。このドキュメンタリー作品は、まさに当事者の視点から、生と死の対話的探究を呼びかけるものだった。冒頭の三〇分を鑑賞した後、「本当に生きるとはどういうことか？」という阿部からの問いかけを受けて、探究的な対話に挑戦した。

「死」と「生」をめぐる対話では、先に確認しておいた通り、経験の有無や多寡に応じて、しばしば参加者の役回りが固定されてしまう。概していえば、経験の豊かな高齢者が語り手、経験の乏しい若者が聞き役になることが多い。しかし絵本や映画を題材とすることで、「対話」の共通の足場が築かれ、すべての参加者が対等に「対話」に参加できる。しかも絵本の場合、一冊を朗読したとしても、さほど時間を要しないし、著作権の問題も発生しない。

こうして第八回からは、絵本が導入された。手始めに、よく知られた『葉っぱのフレディ』をとり挙げたところ、対等な参加が実現され、「共に聴く」雰囲気が醸成された。若い世代を中心に、参加者に好評を博した。

絵本を題材にした対話は、次のように進められる。当日は、まず「大切にしたいこと」を読み合わせ、「対話」に臨む基本姿勢を参加者全員で確認する。次いで、担当者が絵本を朗読する。その際、参加者は、自分のテーブルにある絵本を開き、朗読に合わせて読み進める――絵本はできるだけ多く用意し、各テーブルに少なくとも一冊は行き渡るようにする。引き続き、絵本を読んで感じたこと、気づいたこと、疑問に思ったことなどについて、グループで自由に話し合う。休憩後、各グループの語りを紹介しながら、全体でいくつか問いを立て、対話的な探究へシフトする。全体での対話を終えたら、担当者がもう一度、絵本を朗読する。それを聴きながら、参加者は物語の受けとめ方の変化を味わう。最後に、次回の「問い」を参加者全員で決めて散会とする。次回の「問い」は、解題を添えて、フェイスブック上にアップする。[17]

次の回は、まず「大切にしたいこと」を読み合わせ、次いで「問い」を共有する。そのうえでグループ対話に入り、各々の背景や視点からメンバーたちが問いに回答を試みる。休憩を挟み、各グループの応答を全体で共有しながら、それぞれの前提や相互関係に光を投げかける。最後に、次回の絵本を参加者全員で決めて散会とする。選定した絵本は、フェイスブック上で周知する。

形成期（二〇一六年―一八年）の死生学カフェでは、**表2**の通り、『葉っぱのフレディ』（レオ・バスカーリア、みらいなな訳、童話屋、一九八八年）を皮切りに、五冊の絵本と一通の挿絵つき手紙を題材にした。また二回はゲストスピーカーを招き、「死別後の人生をどう生きるか？」（内宮美知子）と「人はどこから『死ぬ人』にされるのか？」（金子稚子）という問いのもと、対話を進めた。

なかでも第一八回と第一九回の試みはユニークだった。第一八回の対話はフェイスブック上で、次のように報告された――ただし表現の一部を改めてある。

今回は、エリザベス・キューブラー・ロスによる『ダギーへの手紙』を題材に対話を試みました。

エリザベスはある日、小児ガンを患う少年ダギーから手紙を受けとります。そこには「いのちってなに？」「死ってなに？」「どうして小さなこどもが死ななければいけないの？」という三つの問いが記されていました。エリザベスは、自ら挿絵を描き、ダギーに返事を書きました。それが『ダギーへの手紙』です。

いつもの通り、まず朗読を聴きました。続けて各テーブルで、三〇分ほど対話しました。わたしのテーブルでは、子どもにとっての「死」の意味とエリザベスが用いる言葉の意味をめぐって対話が進められました。エリザベスの死生観が色濃く現れた内容に対して、違和感を覚えるという意見も出されました。その後、各テーブルの対話を共有しながら、全体対話へ移行しました。

九歳の子どもであるダギーに対して、当時五〇歳のエリザベスがダギーの実感に添う言葉で語りかけようと努めている。全体対話では、このことに注意が向けられました。ダギーが納得できるように、彼女自身にとっての「生」や「死」の意味を伝えようと、エリザベスは彼女なりに言葉を尽くしているのではないか。

私たちは「死」に直面すると、それをどのように語ればよいのか、わからなくなってしまいます。それは現代社会に生きる私たちが「生」と「死」の物語を共有していないからではないか。参加者からは、このような問題提起もありました。ここから対話は、現代社会における「宗教」の役割へ進みました。

大切なことは、誤ることを恐れず、当事者の主体的な「真理」を語ることではないか。そのためには、「生」や

「死」を語り、聴く場が欠かせない。こうした方向性を確認して、今回のカフェは閉会となりました。（二〇一八年二月一三日）

『ダギーへの手紙』（エリザベス・キューブラー・ロス、アグネス・チャン訳、佼成出版社、一九九八年）には、「神」（God）という語が頻出する。右の報告では、控えめに表現されているが、第一八回の死生学カフェでは、これに対する違和感や疑義が奔出した。それを反映して、全体対話でも「宗教」が主題化された。

しかし右の報告でも確認される通り、エリザベスは九歳の子どもに届くように、彼女自身の宗教的な世界観を伝えようと、最大限に努力したと思われる。自分の実感や信条と異なるという理由だけで、それを論難しても仕方ない。むしろ九歳の小児がんの子どもから、同じように問いかけられたら、わたしたちはどう回答するか。このような問題設定で対話を試みた方が創造的で楽しいだろう。

こうして「あなたならどう書く、『ダギーへの手紙』？」と題されて、第一九回の死生学カフェが開催された。当日は、九名の参加者が「手紙」を携えて来場した。冒頭でそれらを紹介し、ワールドカフェを通して、ダギーへの多様な応答にふれた。休憩後、グループの対話を全体で共有した。

第二三回も、忘れることができない。その前回（第二二回）は、『わすれられないおくりもの』（スーザン・バーレイ、小川仁央訳、評論社、一九八六年）という絵本をとり挙げた。老齢のアナグマとの死別後、仲間の動物たちは悲しみに暮れるが、やがて生前のアナグマが教えてくれたことを想起する。それについて仲間と語り合うことで、「アナグマが残してくれたもののゆたかさ」を実感する。次回の問いを立てる段で、参加者の小児救急医が問題提起した。第二三回死生学カフェの予告を抜粋しておこう――ただし表現の一部を改めてある。

小児救急の現場で働く彼は、医師として救命できなかった「いのち」と向き合い続けています。そしてその立脚点から、死生学カフェの対話にある種の違和感を覚えるといいます。カフェの参加者たちは、これまでの社会生活を通してなんらかの業績を積み上げてきたこと、自分の生命や生き方を受け継ぐ者に恵まれたこと、あるいは充実した体験をしたことに、各自が生きた「意味」を見出すからです。もし生きる「意味」がこのように各人の所業に求められるとしたら、わずか数日で亡くなる子について、いったいどのように生きる／生きた「意味」を語ることができるのでしょうか。（二〇一八年一〇月二九日）

絵本を題材に対話を試み、それを通して共通の問いを立ち上げ、対話するという流れが定着した。それとともに多種の背景をもつ多様な人が対等に参加する「対話」の場が形成された。若い年代を中心に、新しい参加者が多く加わり、参加者数は三〇名前後で安定的に推移するようになった。もはや絵本を用いずとも、自分たちで問いを立て、対話を進められるはずだ。この確信とともに、死生学カフェは次のフェーズへ進む。

四　理念と方法を確立する——成熟期（二〇一九年—現在）

「死」と「生」にかかわる課題は、身のまわりにたくさんある。それらを参加者とともに発掘しておけば、自分たちで問いを立て、対話を進める一助となる。この展望のもと、二〇一九年一月の死生学カフェは、**表3**に記載の通り、「もしバナゲーム」を実施した。参加者のうち、このカードゲームの経験者は一人しかいなかった。

患者とその家族、また医師や他のケア専門職は、人生の終わり（end of life）に際して、なにが大切であると考えるのか。この問いに導かれて、米国のNPO団体（Coda Alliance）が調査研究を実施した。[18] さらにその研究成果に基

づき、「ゴー・ウイッシュ」（Go Wish）というカードゲームを開発した。一般社団法人iACPは、このＮＰＯ団体と契約を結び、ゴー・ウイッシュを邦訳し、独自のルールを加えた。[19] こうして「もしバナゲーム」が産み出された。

あなたが終末期にある（予後が半年である）としたら、どんなことに価値を見出すだろうか。「痛みがない」、「意識がはっきりしている」、「家族の負担にならない」、「家で最期を迎える」、「尊厳が保たれる」、「ユーモアを持ち続ける」など三六枚のカードから、あなたが大切にしたい事柄が記載された五枚を選ぶ。さらにそれを三枚に絞り込み、順位づけする。選定理由とともに、自分が選んだカードをグループメンバーに紹介する。

当日は四、五名のグループに分かれ、右のやり方で、もしバナゲームを進めた。メンバーを入れ替えて、もう一度ゲームを行った後、ゲームを通して気づいたこと、疑問に感じたこと、抱いた問いを各グループと全体で共有した。参加者には新鮮な驚きと高揚感があったようだ。グループ対話は大いに盛り上がり、全体対話でも、初めての参加者が積極的に発言し、新たな視点を提示してくれた。

第二七回は「葬儀」を主題化した。告示の文章を紹介しよう――ただし表現の一部を改めてある。

今年の三月から、参加者に関心のある共通の問いを立て、対話的探究を進めるというスタイルをとっています。次回はその第三弾です。

葬儀のあり方が大きく変化しています。葬儀のかたちと担い手が多様化しています。遺族を中心に営まれる「家族葬」や葬儀そのものを省略する「直葬」が増えています。葬儀の商品化が進み、選択肢が増えたように見えますが、他方で、大都市を中心に、「火葬場の不足」が指摘されます。

私たちの社会では、生と死に関して、どのような変化が進行しているのでしょうか。次回の死生学カフェでは、

葬儀の目的と意義をめぐる対話的探究を通して、この大きな問いにアプローチを試みます。対話的探究を導く中心的な問いは、次の通りです。

葬儀はだれのために営まれるのでしょうか。故人（死者）のためでしょうか、それとも遺族など遺された人たちのためでしょうか。葬儀はそもそもなんのために営まれるのでしょうか。死者の魂を送り出すためでしょうか、それとも遺族など遺された人たちを慰めるためでしょうか。

「あなた」にとって望ましい葬儀と「わたし」にとって望ましい葬儀は、異なるのでしょうか。もしそうなら、その違いはどこから生まれるのでしょうか。次回の死生学カフェでは、参加者の多様な視点から「葬儀」という現象を照らし出します。対話的探究は、各人の「葬儀」観を支える死生観に光を投げかけてくれるでしょう。

対話的探究を通して、「生」と「死」を見つめなおしましょう。いつものスノドカフェで、おいしいコーヒーとマフィンとともにお待ちしています。（二〇一九年六月二四日）

各自の経験を踏まえて、多様な視点から「葬儀」観が語られた。遠方から参加した葬祭業と終末期ケアの関係者は、率直な語りを通して、対話的探究に貢献してくれた。葬儀はなんのために行われるのか。この問いに対して、「悼み」を共有するためであるという回答が提出された。死を悼む動物として、人間は死を共に悼むことができるというのだ。ならば「悼む」とは、どういう行為か。「悼む」ことは、たとえば「冥福を祈る」こととどう違うのか。

こうして次回の対話テーマは、「悼むとはどういうことか」に決まった。しかし全体対話のファシリテーターとして、対話の準備を始めたところ、「悼む」という概念は、予想していたより、はるかに難しいことが判明した。そこで第二八回の死生学カフェでは、参考図書として天童荒太『悼む人』（文春文庫）を指定し、この小説を足がかりに、対話

的探究を進めることにした。

第二九回と第三〇回は、所用のため、やむなく欠席した。世話人代表の筆者が不在になるのは、初めてのことだった。それでも他の世話人が全体対話のファシリテーターを担い、死生学カフェは滞りなく営まれた。死生学カフェの成熟を如実に示す出来事といってよいだろう。

死生学カフェには、全国各地から参加者が集まるようになった。また特別企画の死生学カフェを開催してほしいという依頼も届くようになった。そのうち主要なものを、**表4**にリストアップしておいた。

最初の特別企画は、静岡県島田市の生活介護ケアセンター野ばらで開催された。定例の死生学カフェのメンバーがこの福祉施設に勤めており、職場で死生学カフェをやってみたいと発案したのだ。第八回のカフェと同様、『葉っぱのフレディ』を題材に、グループ対話から全体対話へ進んだ。当日の「ふり返り」では、「死」について他の職員たちの考えを知ることで、日常の言動をより深く理解できた、連帯感が生まれたといった感想が聞かれた。

特別企画の死生学カフェでは、絵本を題材にすることが多かった。形成期の死生学カフェにおけると同様、絵本は、多様な人が対等に対話に参加する足場を与えてくれた。絵本は当初、『葉っぱのフレディ』を使うことが多かったが、二〇一七年後半あたりから、『かないくん』（谷川俊太郎作、松本大洋絵、ほぼ日、二〇一四年）を用いるようになった。前者は書名の通り、フレディという名の葉っぱの一生が描かれる。後者では、孫娘との対話を通して、終末期にある絵本作家の老人が小学校時代の同級生の死を受けとめ直していく。

対話的探究には、問いが欠かせない。そして問いを喚起してくれるという点では、どちらの絵本も優れている。ただ前提を共有できるという点では、『かないくん』の方が多くの参加者にとって馴染みやすいようだ。それは小学校の同級生の死という、おそらく誰にでも経験がある身近な出来事から、物語が立ち上がるからだろう。

表4に記載していない企画も紹介しておこう。東京農業大学（世田谷区）の二回の公開講座（二〇一六年一一月一二日と一七年六月二四日）でも、死生学カフェを試行した。テーマはそれぞれ、「『自然な死』とはなにか？」と「『尊厳ある死』とはどのようなものか？」だった。また在宅ターミナルケア研修会（在宅ターミナル看護支援事業、静岡県訪問看護ステーション協議会）でも、二〇一五から一八年度まで、計十一回の死生学カフェを実施した。当初は絵本を題材に対話を進めたが、やがて訪問看護の経験を踏まえて、参加者が自分たちで問いを立てるようになった。

神奈川県平塚市では、一般社団法人いいケア研究所まちなか保健室から依頼を受けて、三回シリーズの「死生学カフェ春夏秋冬」を開催した。この企画は、男性の介護者や遺族に対する訪問看護師たちの関心から生まれた。それを反映して、ほとんどの参加者は男性の介護者や遺族だった。各回のテーマは「介護するとはどういうことか？」（一九年八月二四日）、「人生の終わりに自分の「希望」を叶えるため、なにについて、だれと、どのように対話したらよいのか？」（一一月二三日）、「大切な人がいない世界を生きるとはどういうことか？」（二〇年二月八日）だった。

二〇一九年一二月四日には、国際共同研究（The Mitori Project）の一環として、特別企画「日本語と英語で死生学カフェ」（Bilingual Death Cafe）を試行した。[20] グラスゴー大学の研究者たちをはじめ、国内外から四〇名の参加者を迎えて、「死にかかわる家族の役割と責任とはなにか？」という問いのもと、日本語と英語で対話に挑戦した。

看取りや葬儀について、「家族」には特別な役割と責任があるのか。「孤立死」や「直葬」の増加に見られるように、家族の役割と責任は時代に応じて変わるのか。参加者の社会・文化的背景の違いを楽しみながら、対話的探究を進めた。

二〇一七年から死生学カフェの世話人研修会を始めた。最初の年は、富士市の古民家を会場に、丸一日かけて実施した（八月一一日、一〇時三〇分―一六時四〇分）。まず死生学カフェとのかかわりを一人ひとりがふり返り、今後の抱負や展望を述べた。次いで「対話」と「ファシリテーション」について学び、「世話人カフェ」を実施した。最後に、

カフェのマネジメントに関する具体的な課題を共有し、対処法や改善策について話し合った。

二〇一九年は、静岡大学を会場に、ジョイントセミナーを開催した（八月一八日、一〇時三〇分―一七時一〇分）。静岡の死生学カフェの世話人だけでなく、東京や福岡で死生学カフェを主宰するメンバーが集まった。死生学カフェに参画する理由や動機、活動を通した学び、直面する課題やチャレンジ、対話を通して生と死を探究する意義について、グループと全体で対話した。昼食後は、参加者全員で「問いを立てるエクササイズ」に取り組んだ。その後、相互評価の高かった問いの発案者がファシリテーターを担い、「試行カフェ」を実施した。終了後は、対話的探究の展開、個別の発言、ファシリテーションについて、参加者全員でふり返った。

以上のような歩みを通して、死生学カフェの理念と方法は確立された。それは最新版の「大切にしたいこと」（**資料1**）から確認できる。六つの項目のうち、2では対話を通して「共に探究する」という方針が示される。これは死生学カフェとデスカフェの差違にかかわる。また5では、参加者の「生き方とそれを支える考え方」を表明することが推奨される。これは死生学カフェと哲学カフェの異同にかかわる。

五　対話を通して生と死を探究する――死生学カフェの意義と課題

本節では、最新版の「大切にしたいこと」の方針2と5を糸口に、デスカフェと哲学カフェとの対比から、死生学カフェの理念と方法を浮かび上がらせる。そのうえで小論の冒頭で掲げた四つの問いに回答を試みる。

（一）対話を通して共に探究する

これまで確認してきたように、「死」に対して、人間は二重の意味で平等である。「死」に関しては、だれもが当事者

であり、にもかかわらず「不知」を免れない。「死」をめぐる諸課題は、けっして他人事でないから、「対話」を通して学び合うことができる。「不知」の自覚に基づくかぎり、その対話は探究的なものになる。そして探究的な対話は、共通の問いを必要とする。

にもかかわらずデスカフェでは、共通の問いを設定することが禁じられる。ガイドライン（6.1）では、「特定のテーマを設けない、また問いや（わけても）ゲストスピーカーを立てない」という方針が堅持される。

デスカフェでは、問いの設定が禁じられる。それはなぜか。「死に関して、人びとはすでに討論すべきことを十分にもっている」（傍点強調は引用者による）からである。わざわざ問いを設定して、その表出を妨げるべきではないというのだ。ここで「討論すべきこと」とは、なにをいうのか。たとえば「死」に関する具体的な経験や個人的な関心だろう。参加者は自らの「死」の思想を語ってもよいし、好奇心から発言してもよい。

デスカフェは自由に「討論する」（discuss）場であって、「対話」（dialogue）を試みる場ではない。語る者と聴く者の役割が偏っても、固定されても、特に問題とならない。「固有名をもった生と死の語り」を生み出すことにも、「共に聴く」ことの実現にも、心を砕く必要はない。デスカフェでは、草創期から死生学カフェが直面してきた諸課題が素通りされるのだ。

死生学カフェはソクラテスとともに、大切なこと――ここでは「死」――を知らないという不知の自覚から出発する。それに応じて対話を通して共に探究する。それに対してデスカフェは、「死」は既知であるという前提から始める。既知の事柄について、共に探究する必要はない。だからデスカフェでは、参加者が思いのまま、「死」について語るのだ。

デスカフェに加盟するかどうか、死生学カフェでは、創設直後から検討を重ねてきた。しかし死生学カフェは、独自の道を歩むことになった。理由の一端は、マネジメント方針の違いにある。デスカフェでは「入場料をとらない」

で、「匿名の寄付を募る」という原則（8.2）が掲げられる。しかしこの方針を厳密に守ることは、難しいように思われた。もうひとつ、それよりはるかに重大な理由は、右で考察した通り、理念と方法の違いに求められる。対等な「対話」の場を創り上げるため、共通の問いのもとに探究を進めるという点で、死生学カフェはデスカフェと一線を画すのだ。

（二）「生き方」の問題を括弧に入れない

哲学カフェと死生学カフェは、対話的探究を試みるという点で一致する。しかし参加者の「生き方」を対話的探究のうちにどう位置づけるかという点で、二つの対話カフェには違いが見られる。

哲学カフェでは、共通の問いが立てられ、それに対する参加者の回答や見解が提起される。多様な考え方や見方が俎上に載せられ、それらの論拠が共に究明される。しかし、それらの考え方が各人の生き方とどう結びついているのかは、ほとんど問題にされない。なるほど各人の体験や知見は語られる。しかし「どのように生きるか」と正面から問われることは、きわめて稀である。この種の問いは、始めから排除されている感さえある。各人の考え方は、各個の生き方から切り離されている。

哲学カフェでは、各人の生き方に光が投げかけられず、吟味が加えられることもない。それに応じて各々の生き様を賭した激しいやりとりは行われず、広く知られた事柄や一般的な知見に基づいた見解が多く表明される。こうして哲学カフェの〈対話〉は、多種の回答を陳列する展覧会の様相を呈する。

はたしてこれを「哲学対話」と呼ぶことができるのか。もし「哲学対話」のモデルを「ソクラテスの対話」に求めるならば、否である。生き方の吟味を欠いて、ソクラテスの対話は成立しないからだ。

ソクラテスその人は対話を通して、相手と自分の「考え」だけでなく、「生き方」を吟味する。対話の目的は、自分の意見を披瀝することや相手を説得することにあるのではなく、大切な事柄の真理を共に究明することにある。この目的を遂げるためには、真剣な問いかけと率直な回答が欠かせない。プラトンの描くソクラテスは、対話相手にそのような態度を要求し、「いかに生きるべきか」と問いかける。[21] 生き方の吟味を欠いて、ソクラテスの対話は成立しない。それは哲学者（愛知者）をソフィスト（知者）から区別する一線でもある。[22]

「ソクラテスのカフェ」という名のもと、マルク・ソーテは哲学カフェを創始した。しかし、そこでは自他の生き方の徹底した吟味を行わないまま、彼は場所を移して、哲学相談所を開業した。「哲学カフェ」は始めから、自他の生き方を吟味する場ではなかったのだ。生き方とそれを支える考え方が吟味されないところでは、「哲学」の学説や術語を援用することを禁じられると、参加者は各々の「知見」や「経験」を披瀝することになる。

それに対して死生学カフェは、「大切にしたいこと」の1で明記される通り、対話を通して死とともに生きることを学ぶ場である。[23] 生きる営みのなかで「死」と出会い、「どのように生きるか」という問いを突きつけられる。そしてその問いを抱えて、死生学カフェに参加する。いかに生きるかという問いは、死生学カフェの中心に位置する。とはいえ自分の生き方とそれを支える考え方を人前で表明するのは、なお勇気を要する。そこで二〇一九年一二月四日の改訂に際して、5の指針を追加した。

対話的な探究においては、一般に流布している考え（doxa）ではなく、その人自身の生（生き方）の基盤となっているような考えを言葉にする努力が求められる。これに応えるとき、対話は、自他の生を吟味する場となる。それを継続していくことで、各人の生がかたちを変える。相手の生と向き合い、対話を続けることで、互いの生がかたちづくられるのだ。

さて小論の冒頭で、次の問いを掲げておいた。①なぜ対話を通して生と死を探究するのか。②そもそも対話するとは、どういうことか。③人びとはなにに惹かれて、なにを求めて、死生学カフェに参加するのか。④死生学カフェでは、どのような対話が生み出されているのか。このうち最後については、前節まで、詳しく紹介してきた。小論の最後に、残された三つの問いに回答しておくことにしよう。

① なぜ対話を通して生と死を探究するのか

相手と自分の双方にとって既知の事柄については、探究する必要がない。一方にとって既知、他方にとって未知の事柄については、知らない者に対して、知っている者が知を授ければよい。ある事柄が双方にとって未知である場合にのみ、探究が成立する。では「生」と「死」について、私たちはよく知っているのか。

孔子は、「死」について弟子から問われ、「未だ生を知らずんば、焉んぞ死を知らんや」と応える。[24] 同様にソクラテスは、裁判の被告として、次のように陪審員へ語りかける。

> 死を恐れるということは、皆さん、知恵がないのに、あると思いこむことにほかならないからです。それは知らないことについて、知っていると思うことなのですから。死というものを、だれ一人として知らないわけですし、死が人間にとって、あらゆる善いことのうちで最大のものかもしれないのに、そうかどうかも知らないのですから。人びとはかえって、最大の悪だとよく知っているつもりで恐れているのです。[25]

「生」と「死」について、未だよく知らないから、対話を通して生と死を探究するのだ。ならば対話するとはどうい

うことか。

② 対話するとはどういうことか

対話は、共通の問いのもとに進められるから、共通の問いが欠かせない。参加者で問いを設定してもよいし、あるいは一方が抱く疑問や問いを、他方が受けとめ、共有してもよい。問いが共有されるプロセスは、ほかにも考えられるだろう。いずれにしても、対話には共通の問いが不可欠である。

共通の問いのもと、それぞれの背景や経験に応じて、多様な回答や見解が提示される。ある人の発言に触発されて、別の人が発言する。ある言葉を聴くことで、新しい語りが生まれる。一人ひとりの言葉（logos）を通して／貫いて（dia）、共同の探究として対話（dialogue）が進められるのだ。

対話の場合、共に探究を進めることで、各人の見解が変わることがある。探究なのだから、当然である。根本的な問題に対する回答が変われば、生き方も変わってくるはずだ。逆にいえば、各人が自分の生き方を背負い、大切にしている考えを携えて臨むとき、このような対話が可能になる。

しかし討論（discussion）では、各人の生き方やそれを支える思想は、基本的に問われない。それに応じて、たとえばある形式の討論（debate）では、原子力発電、憲法改正、死刑制度、尊厳死などの重要な課題について、各々の信念を顧慮することなく、賛成派／反対派に分かれて、メリット／デメリットを〈客観的〉に論じることになる。

③ なにに惹かれて、なにを求めて参加するのか

死生学カフェでは、多様な問いのもと、生と死をめぐる対話が試みられてきた。人びとは、なにに惹かれて、なに

を求めて、死生学カフェに参加するのか。

「死について語れる場がほしかった」という声がよく聞かれる。「死」にかかわる話題は、縁起でもないと忌避される。「重い」課題を受けとめられず、聞いていて、怒りだす人や説教する人もいる。語りたくても、聴いてくれる人がいない。語れる場がないのだ。

「死について考える機会がほしい」という声も聞く。「死」はけっして他人事ではない。にもかかわらず、日常生活の中で立ちどまって、「死」について考える機会は、ほとんどない。かりに機会が与えられたとしても、独りで考えると袋小路に陥ってしまう。考えておきたいが、その糸口を見つけられない。だからだれかと共に考えたい。

参加者の大半は、「語りたい」という思いに駆られて、死生学カフェへ足を運ぶ。当初の関心は「聴くこと」ではなく、「語ること」にあるのだ。しかし、はじめは語るだけだった人も、対話の経験を積むことで、聴くようになる。「語りたい」とやって来る新来者を迎え入れ、その話に耳を傾けるようになる。

「語る人」から「聴く人」への変化は、どうして起こるのか。聴いてもらうという経験が人を変えるようだ。聴いてもらう経験を通して、聴くことができるようになる。シモーヌ・ヴェーユの洞察によれば、人は相手から「注意」(attention)を向けられることで、注意を向けることができるようになる。その注意が相手の言葉に向けられるならば、「聴く」という態度が生まれる。また相手の存在に向けられるならば、「あなたはどのように苦しんでいるのか」という問いかけがそこに実るだろう。[26]

参加者へ向けられた問いは、筆者自身へも向けられて然るべきだろう。なぜ筆者は死生学カフェで対話を続けるのか。筆者にとって死生学カフェは、どのような場なのか。

古代ギリシアの基本理解によれば、人間は「死すべきものたち」(brotoi)であり、「死という定め」(mortality)の

もとにある。この定めはさしあたり、「死ななければならない」という必然性を物語る。しかし同時に、それは可能性の源泉でもある。いずれ死ななければならないと「知っている」からこそ、死すべきものたちは、一つひとつの事柄について吟味し、選択を下し、よく生きることを試みるからだ。「死」という可能性の受けとめ方に応じて、死にゆく実際の歩みが変わるのだ。

「死」という共通の制約と可能性を前にして、死すべきものたちは学び合い、支え合うことができる。死生学カフェは、死すべきものたちの対話の場として、このような連帯の足場を提供する試みである。「死の練習」(meletē thanatou)のためのオープンスペースと表現してもよい。[27]

死が差し迫ってようやく騒ぎ立てるのでなく、今、ここで、対話的探究を通して、自他の生き方とそれを支える考え方を吟味ながら、死とともに生きる知恵を学び合う。死すべきものたちの一人として、筆者はその対話的探究に参加するのだ。

残された課題もある。「不知」の自覚のない人、自分はよく知っていると思っている人は、探究に赴かない。対話を通して探究するという道を、そもそも歩み始めない。そのような人たちは、おそらく死生学カフェへ足を運ぶことがない。かりに運んだとしても、長続きしない。ここに探究モデルの制約がある。ケアモデルと探究モデルの関係は、このような視角から捉え返す必要がある。

死すべきものたちの対話の場には、たしかに探究モデルがふさわしい。しかし私たちの日常生活には、「ケア」と「探究」のいずれも欠かせない。死すべきものたちは脆く傷つきやすいからだ。互いの心身を支え合いながら、私たちは学び合いの拠点を形成し、生と死の諸課題に対処していかなければならない。そこでは「ケア」と「探究」の関係は、相克的ではなく、相互補完的である。

「ケア」と「探究」は、私たちの社会生活を支える二つの柱である。一方が他方に還元されてはならないし、両者が融合されてもならない。「ケア」と「探究」を二つの焦点と定めるとき、迫りつつある多死社会とそれを支えるコミュニティの像が描き出されるだろう。

六　結びにかえて

死生学カフェの全国ネットワーク化に乗り出そうと構想していた矢先、新型コロナウィルスの感染拡大という事態に直面した。二〇二〇年三月の死生学カフェは、休会を余儀なくされた。こうした状況のなか、五月の死生学カフェは、オンラインで対話に挑戦することにした。その告示の文章を紹介して、小論を閉じることにしたい。

新型コロナウィルスのパンデミック（感染爆発）のため、つらい思いをされている方が多いのではないでしょうか。親しい人や身近な人を亡くされた方もおられるかもしれません。医療や福祉の現場で奮闘を続けておられる方々もおられるはずです。仕事や学業に大きな打撃を受け、平穏な日常生活を脅かされている方々も少なくでしょう。このままでは社会や経済が壊れてしまうと、危機感を募らせておられる方もいるでしょう。苦難のなかに身をおきながら、人と対面することもできず、それゆえ不分明な思いを言葉にするチャンスにも恵まれないまま、苦悩とともに生活されている方々が多いのではないでしょうか。

そんなときこそ死生学カフェに出かけ、互いの言葉に耳を傾けたい。伝聞の情報ではなく、生の声に聴きたい。そう思います。ただ緊急事態が宣言されている現状で、対面して対話することは困難です。

そこで今回思い切って、オンラインの死生学カフェを企画しました。対話を主導する問いは、「新型コロナウィ

ルスのパンデミックは、わたしたちになにを問いかけているのか？」です。近況報告も兼ねて、みなさんの受けとめ方や考え方を共有してください。率直な疑問や問いを提起してください。

新型コロナウィルスが突きつける課題をめぐって、対話的探究を重ねることで、今後の社会の展望が開かれるかもしれない。オンラインでの試行とともに、死生学カフェはどのように展開していくのか。挑戦の旅はまだ続く。これまで死生学カフェを支えてくださった一人ひとりに、衷心から感謝申し上げる。

表１　2015年の死生学カフェ

	開催日	提題タイトル	参加者数
第１回	３月７日	あなたにとって、死ぬとはどういうことか？	45名
第２回	５月２日	私とイネといのち	31名
第３回	７月４日	最愛の人が脳死になったら臓器提供しますか？	25名
第４回	９月15日	死者からの贈り物？　父を看取った経験から	21名
第５回	11月７日	アフリカでみた生と死　医療の届かない場所で	19名

表２　2016－18年の死生学カフェ

	開催日	提題タイトル	参加者数
第6回	１月９日	「喪失とともに生きる」ことには、どのような意味があるか？	25名
第7回	３月19日	「本当に生きる」とはどういうことか？	25名
第8回	５月21日	『葉っぱのフレディ』を読んで	27名
第9回	７月16日	葬式にはどのような意味があるか？	18名
第10回	９月17日	『恋ちゃんはじめての看取り』を読んで	24名
第11回	11月19日	よい看取りとは？	20名
第12回	１月21日	『ぶたばあちゃん』を読んで	35名
第13回	３月18日	理想の死に方とは？	34名
第14回	５月20日	死別後の人生をどう生きるか？ （ゲストスピーカーとともに）	31名
第15回	７月15日	死者にできることとは？	32名
第16回	９月16日	『かないくん』を読んで	24名
第17回	11月18日	死とともに始まるものとはなにか？	27名
第18回	１月20日	『ダギーへの手紙』を読んで	32名
第19回	３月17日	あなたならどう書く、『ダギーへの手紙』？	33名
第20回	５月19日	「生きること」と「死ぬこと」の境 ～人はどこから「死ぬ人」にされるのか？～ （ゲストスピーカーとともに）	35名
第21回	７月21日	なぜ、どのように「死」と向き合うのか？	32名
第22回	９月15日	『わすれられないおくりもの』を読んで	26名
第23回	11月17日	生きる／生きた「意味」はどこにあるのか？ （小児救急医からの問いかけ）	24名

表３　2019年－現在の死生学カフェ

	開催日	提題タイトル	参加者数
第24回	１月19日	「もしバナゲーム」で今後の対話テーマを発掘しよう！	19名
第25回	３月16日	「孤独死」と「孤立死」からなにを学ぶか？	30名
第26回	５月18日	自分の「死」について、楽しみなこと	34名
第27回	７月20日	葬儀はだれのため、なんのために行うのか？	29名
第28回	９月21日	「悼む」とはどういうことか？	21名
第29回	11月16日	「死者を忘れない」とはどういうことか？	16名
第30回	１月18日	死はなぜ語りにくいのか？	25名

表４　特別企画の主な死生学カフェ

開催日	会場（場所）	テーマ
2016年９月24日	生活介護ケアセンター野ばら（島田市）	『葉っぱのフレディ』を読んで話し合おう
2016年12月21日	ハービスPlaza（大阪市）	死生学カフェ＠バイエル薬品
2017年７月25日	公益財団法人日本生産性本部（渋谷区）	対話を通して生と死を探究する
2017年11月25日	百町森（静岡市）	絵本を読んで哲学してみませんか
2017年11月25日、12月２日、９日	静岡市北部生涯学習センター（静岡市）	「死」から「生」を学ぶ対話カフェ（３回シリーズ）
2018年４月15日	カフェLOG（広島市）	葬儀に携わる人のための死生学カフェ
2018年９月16日	海カフェnef（新潟市）	死生学カフェ＠にいがた海がたり
2018年12月８日	朱鷺メッセ（新潟市）	死生学カフェ（死の臨床研究会年次大会）
2019年６月８日	二松学舎大学（千代田区）	死生学カフェ（日本コミュニケーション学会）
2019年７月６日	六廣亭（福岡市）	死生学カフェ in 福岡

資料１

死生学カフェで大切にしたいこと

2019年12月４日改訂
2015年９月５日作成

死生学カフェでは、生と死にかかわる多様な課題について、対話を通して探究を試みます。以下の方針を守りながら、対等で開かれた対話の場を創り上げていきましょう。

１．死とともに生きる

「死とともに生きることを学ぶ」(死生学) という姿勢を大切にしましょう。「死」をタブー視したり、遠ざけたりするのでなく、逆に「生きる」ことを忘れ、「死」ばかりを見つめるのでもなく、「死とともに生きる」知恵を身につけましょう。

２．共に探究する

参加者のなかには、かけがえのない人との「死別」を経験された方、深刻な「死」の体験をされた方がおられるかもしれません。あるいは終末期ケアの専門職がおられるかもしれません。わたしたちは、その貴重な経験に耳を傾けたいと思います。ただ同時に、生と死には常に未知の部分が残されている、だからこそ共に探究するのだという謙虚さを大切にしたいと願っています。

３．対等で開かれた対話に挑戦する

カフェには、社会的地位や権威から自由に、対等の立場で議論するという伝統があります。カフェは市民に開かれた討論の場を提供し、それを通して市民社会の成立に大きな役割を果たしてきました。このカフェの精神を継承し、相手に対して尊敬の念を抱きながら、対等な立場で、開かれた言葉で対話を試みましょう。

４．聴くことから始める

聴く人がいなければ対話は始まりません。対話の第一歩として、相手の語りに真剣に耳を傾けることから始めましょう。といっても、すべての言葉に納得、共感する必要はありません。むしろ納得いかないところ、安易に共感できないところを糸口に発言を試みることで、注意深く対話を創り上げていきましょう。

５．自由に発言する

一つひとつの発言は、対話的探究への貴重な貢献です。空気を読んだり、他の参加者の評価を気にしたりすることなく、自由に発言してください。あなたの生き方とそれを支える考え方を反映させて、重厚な見解、ユニークな意見、ふとした疑問を提起してください。

６．参加者のプライバシーを尊重する

すべての参加者が心を開き、安心して発言できるように、インターネット上も含めて、カフェで知った個人情報を第三者に提示することは控えましょう。

皆さんにとって新しい出会いと豊かな対話の場となるように、カフェを運営する世話人たちがお手伝いいたします。生と死は、すべての人間の共通課題です。真摯に、しかし焦らずに、じっくりと探究を進めていきましょう。

注

1 岡部健・竹之内裕文『どう生き、どう死ぬか　現場から考える死生学』弓箭書院、二〇〇九年、六・二七頁。

2 竹之内裕文『死とともに生きることを学ぶ　死すべきものたちの哲学』ポラーノ出版、六四―五頁。

3 同書、七六―七頁。

4 同書、一八三、二〇一頁。

5 竹之内裕文「北欧ケアの社会的基盤と思想的拠り所――日本におけるケアの再構築のために」、『文化と哲学』第三〇号、静岡大学哲学会、二〇一三年、一―三七頁。

6 福沢諭吉『文明論之概略』岩波文庫、一九九五年、一一七―八頁。

7 ただし日本社会でも、東日本大震災の前後から、討議型世論調査（Deliberative Polling）、科学技術をめぐるコンセンサス会議、市民討議会など、ミニ・パブリックスが試行されている（篠原一編『討議デモクラシーの挑戦　ミニ・パブリックスが拓く新しい政治』岩波書店、二〇一二年）。

8 竹之内裕文「カフェで市民とともに哲学する――哲学カフェ@しぞ～かの歩みをふり返って」、『静岡大学　生涯学習教育研究』第十七号、静岡大学イノベーション社会連携推進機構地域連携生涯学習部門、二〇一五年、四一―五八頁。なお哲学カフェの名称は「哲学カフェ@しぞ～か」から「哲学カフェ@しずおか」へ変更した。

9 竹之内裕文「死とともに生きることを学ぶ　対話する死生学のために」、竹之内裕文・浅原聡子編著『喪失とともに生きる　対話する死生学』所収、ポラーノ出版、二〇一六年、二九七―三〇〇頁。

10 Marc Sautet, Un café pour Socrate, Robert Laffont, 1995（マルク・ソーテ『ソクラテスのカフェ』堀内ゆかり訳、紀伊国屋書店、一九九六年）.

11 https://www.dougy.org/（二〇二〇年四月一〇日閲覧）

12 https://deathcafe.com/（二〇二〇年四月一〇日閲覧）

13 Ursula K. Le Guin, *The Earthsea Quartet*, Penguin Books, 1993, p. 97（アーシュラ・K・ルグウィン『ゲド戦記Ⅲ　さいはての島』清水真砂子訳、岩波書店、二〇〇六年、一三六―七頁）.

14 http://sndcafe.net/shopinfo/sc7（二〇二〇年四月一〇日閲覧）

15 阿部恭嗣『七転び八起き寝たきりいのちの証し　クチマウスで綴る筋ジス・自立生活二〇年』竹之内裕文編、新教出版社、二〇一〇年、三二〇―一頁。

16 前掲『死とともに生きることを学ぶ　死すべきものたちの哲学』一五一―一七七頁。

17 https://www.facebook.com/shiseigakucafeshizuoka/（二〇二〇年四月一〇日閲覧）

18 Karen E. Steinhauser, Nicholas A. Christakis, Elizabeth C.Clipp et al, Factors considered important at the end of life by patients, family, physicians, and other care providers, JAMA Vol.284, No. 19, 2000, pp. 2476-2482

19 https://www.i-acp.org/game.html（二〇二〇年四月一〇日閲覧）

20 国際共同研究については、次を参照されたい。http://endoflifestudies.academicblogs.co.uk/the-mitori-project/（二〇二〇年四月一〇日閲覧）

21 Platonis Opera, Tomus III, Oxford Classical Texts, 1903, 500b5-c7（「ゴルギアス」加来彰俊訳、『プラトン全集9』、岩波書店、一九七四年、一六五―六頁）.

22 納富信留『プラトンとの哲学　対話篇を読む』岩波書店、二〇一五年、二二二頁。

23 初版の「大切にしたいこと」は、次の一文から始まっていた。「人生は不思議で悲哀にみちていて、私たちはたえず『どのように生きるか？』という問いを投げかけられています」。

24 『論語』加地伸行訳注、講談社学術文庫、二〇〇四年、二四九頁。

25 Platonis Opera, Tomus I, Oxford Classical Texts, 1900, 29a3-b2（プラトン『ソクラテスの弁明』納富信留訳、光文社古典新訳文庫、二〇一二年、五九―六〇頁）.

26 Simone Weil, Attente de Dieu, Éditions Fayard, Paris, 1966, p. 74（シモーヌ・ヴェイユ『神を待ち望む』田辺保・杉山毅訳、勁草書房、一九八七年、九八頁）.

27 Platonis Opera, Tomus I, op. cit, 81a1-2（プラトン『パイドン』岩田靖夫訳、岩波文庫、一九九八年、七九頁）.

（たけのうち　ひろぶみ　静岡大学農学領域教授）